

「父の早起き」

“ポンドスン、ポンドスン…”。惰眠をむさぼる私の眼を醒まさせる早朝の音が、長年にわたる我が家の日課であった。“ポン”はボールを打つ音、“ドスン”は丸い的を描いたキャンバスにボールが当たる音である。もっとも、父が庭でアプローチの練習をするこの騒音で初め目が醒めるが、やがてその単調さが再び私を眠らせる効果ももっていた。75歳で病に倒れるまで、父のこの日課は雨にも負けず、風にもめげずに続いた。当時の私は「毎朝よく飽きもせず」と思うだけであったが、父の死後ゴルフを嗜むようになったのち当時のことを思い出し、改めて父のゴルフに対する熱意と愛情を知った。

両親が亡くなったあと、西川部長にお願いして父の競技記録を頂戴した。古希のエッセイを、とクラブから原稿用紙が届いたとき、私もとうとうそんな齢になるのかと、改めて父の競技記録を見た。1900年生まれの子が70歳になったのは大阪万国博覧会の開かれた1970年である。当時HDCP22で、その年競技に12回出場している。ネット90前後で入賞はない。記録を見ると、父が最後に優勝したのは9年前の1961年の初夢杯で、そのときのHDCPは13とある。以後、古希になるまで数回入賞している程度であるから、60歳くらいを境に父の腕前が急速に低下したことを私はこの記録を改めて見ることによって初めて認識した。あれほど毎日練習をしていたにもかかわらず、である。父が古希を迎えた当時、私は大学紛争の末期で、団交、封鎖と研究どころでなく、暢気に(?)「亡国の遊戯」に熱中している父をうらめしく思うほどであった。しかし、あの頃すでに病魔が忍び寄りつつあった父のゴルフは下降中で、父なりにそれを止めようと努力中であつたのであろう。

さて、古希という生理的齢を基準にして考えてみると、ゴルフに関連して私たち父子を比較する要因は幾つかある。それは以下の3つであろうか：(1) 遺伝的要因、(2) キャリア、(3) ゴルフに対する熱意と練習。

まず、もし遺伝的要因が大きいとすれば、古希になる私がこれからいくら努力しても上手になるはずがない。事実、私のHDCPは現在低下の一途である。つぎに、50歳を過ぎてゴルフを始めた私と、おそらく30代初めから熱心だった父とはキャリアが違う。再び記録を見ると、父は1953年1月(53歳)にHDCP7になっている。以後、1963年まで12-13を維持しており、1966年以後でも22のままである。この間、優勝を6回(また、2位以下の入賞も多い)しており、父の最盛期が50代であったことがわかった。父の生前、私はゴルフに無関心であったが、暮れになると応接間に飾ったカップ(当時の優勝カップは今より大きかったように記憶する)を嬉しそうに磨いていた父の様子を思い出す(カップはもっと沢山あったように記憶するが、父の死後に起こった火災で焼失し、今は数えることもできない)。戦前、満州国の奉天に住んでいたが、市の郊外、清朝の始祖を祭る東陵の近くにゴルフコースがあり、そこへ父は通っていた。子供の頃ときどき父に同行し、クラブハウスで食事をした記憶がある。引き揚げ後、茨木でゴルフをするために今の所に住居を定めるほどのゴルフ狂であったが、そのゴルフに対する情熱を全く理解しようともせず、父の生前私はクラブを握ったこともなかった。今にして思えば悔やまれる。最後に、熱意と練習という点は私ども父子の相違の最大のものといえる。父は独特のフ

フォームでボールを打っていたそうだが、練習を重ねることによって自分なりの技を体得していたのであろう。翻って息子の私は練習もろくにせず、アプローチが苦手などというのは厚かましいと先輩に言われたことがある。家も近いのになぜ練習場に行かぬ、と親切で友情厚い先輩友人の方々を歯痒ゆがらせるほどの練習嫌いである私でも、たまには出掛ける気になることもある。しかしいざアプローチの練習を始めると、練習場管理の女性Mさんが見るに見兼ねるほどの下手クソである。洛友会の偉大なる先輩KY氏や高校先輩のKK氏は「お前は勘が悪い」と匙を投げそうであるし、仲良しの球友TS先生、RS先生は「勿体ない」と上品に慨嘆して下さる。また、よく一緒に回るAクラスの若いTTさんは私のゴルフを称し、愛情をこめて「粗雑」と言う。

ゴルフを始めた1980年頃、HDCPは始めた齢の半分にはなる、と聞いた。そうすると、私がゴルフを始めたのが53歳であったから、60代に23にもなったのであるから、まあ人並みか、といえぬこともない。遺伝的要因の発現は環境によって支配されるのは生物学の原則である。もし、父のゴルフ能力が多少とも遺伝しているなら、練習によってもっとうまくなれる筈とも思う。父は古希を過ぎたころから病氣勝ちになったため、練習に努めたにもかかわらず、いい成績は得られなかった。私は今のところゴルフに差し支える体の故障もないので、古希を過ぎてはまだ腕前上昇の可能性はあるのではないかと望みをもっている。古希を機会に亡き父に感謝しつつ、早起きを心掛け、アプローチとパターの練習に挑戦する、という新しい目標を持つことにしたので、諸先輩、球友諸氏のご指導をお願いしたい。(IBARAKI No.508、17-18、1998)

2. 音楽

「自然科学者と音楽」

ちょうど5年前、すなわち1972年の元旦、私はウィーンフィルハーモニーによる新年演奏会を聴く機会を得た。1月1日の朝、1813年に創立した楽友協会(Musikverein)大ホールの真ん中やや前寄りの席で聴いた当日の最初の曲はJ.シュトラウスの“春の声”であった。毎年元旦(大みそかにも同じ曲目が演奏される)のこの演奏会の指揮者を務めているウィリー・ボスコフスキー(Willi Boskovsky)の弓が振り降ろされた瞬間、このオーケストラの発した響きは私を貫いた。ホールの舞台、とくに指揮台のまわりは色とりどりの花で飾られ、舞台全体はテレビ放送のため、照明がほどこされて、当日のホールはウィーンフィルハーモニー特有の美しい音色とともに何とも表現し難い華麗さであった。何度かのアンコールののち、シュトラウス父の“ラデッキー行進曲”が終って、元旦の快晴の昼の街へ出たとき、私は気が抜けたように、ほっとため息をついた。

シュトラウスの作品を中心にワルツやポルカを演奏するこの演奏会は、1941年、クレメンス・クラウス(Clemens Krauss)によって始められ、毎年恒例となったもので、1954年、彼の死後、当時コンサートマスターであったボスコフスキーがシュトラウスのヴァイオリンの“立ち弾き”(ヴァイオリンを弾きながらオーケストラを指揮する)の伝統をもってクラウスのあとを